

コロナ危機に直面する私 たちのウェルビーイング

内閣府経済社会総合研究所

桑原進

本日の桑原の話の流れ

- 今から小塩先生と二人で、社会科学高等研究院 EBPMセンターと内閣府経済社会総合研究所で取り組んできた調査研究の概要について、ご説明したいと思います。
- まず、私の方から、内閣府の側で、本共同研究の概要をお話します。
- 次に調査研究の対象であるウェルビーイング、調査研究の中心となるインターネット調査の概要について説明します。
- 私の後に、小塩先生から、研究の成果について、お話いただきます。私からは20分ほどお話しさせていただきますと思います。

コロナ危機とポストコロナの経済社会に関する研究

国際比較や個票データ等に基づく精緻なエビデンスの蓄積を図り、将来の類似危機に対する経済社会面での知的備えを強化。同時に、ポストコロナに向けて全世界的に変貌を遂げる経済社会を展望し、課題となる政策の方向性を探る。二つのテーマ「コロナショックから何を学ぶか?」「ポストコロナで経済社会はどう変わるのか?」を設定し、2年計画で実施。

コロナショックから何を学ぶか

令和3年度

- 山本勲主査(慶應大学教授)のもと、三つのワークショップに分かれ、議論(R3.9月~11月、R4.3月)。WS1 雇用、消費、家計(照山博司 京大教授)、WS2 企業(滝澤美帆 学習院大学教授)、**WS3 行動変容(小塩隆士 一橋大学教授)**
- この他、雇用維持政策に関する先進的な英国の制度に関する委託調査。研究所内における独自研究などを実施。

令和4年度

- 令和3年度の成果(**WS3のサーベイ論文**を含む)を「経済分析」に掲載。
- ESRI経済政策フォーラムにおいて**WS3のサーベイ論文**を含む成果を発表
- 一橋との共同研究を継続し、成果を研究所公表物、海外のジャーナル等から公表**
- ESRI国際コンファレンスを開催(R4.12.15ハイブリッド開催)。内外の実証研究の成果を蓄積。

ポストコロナの経済社会

令和3年度

- 星岳雄主査(東京大学教授)のもと、国際ラウンドテーブルを開催(R3.12.17オンライン開催)。
- チャタムハウスルールで議論を行っており、スピーカーが特定されない形で議長サマリーを取りまとめ。**山本主査より、WS3の成果を含むコロナショック研究の中間報告。井伊雅子一橋大学教授も参加。**
- 主な論点:セーフティネット、財政金融政策、国際協調などに共通する課題

令和4年度

- 令和3年度に抽出された論点を中心に、星主査のもと国際ラウンドテーブルを開催(R4.12.14ハイブリッド開催)。政府への信頼と情報提供(**一橋大学との共同研究の成果も活用**)、雇用ショックへの対応、パンデミックの国際経済への影響のテーマで議論。
- 議論は一般にも公開され、サマリーもスピーカーが特定される形でとりまとめ。

赤字が一橋大学との共同研究です。

コロナ禍の生活環境と行動変容に関する調査

- これまで内閣府では、我が国の経済社会の構造を人々の満足度（Well-being）の観点から多面的に把握し、政策運営に活かしていくことを目的に「満足度調査・生活の質に関する調査」を4度実施。
- 国際共同研究の過程で小塩教授からご提案。内閣府が実施した「満足度調査・生活の質に関する調査」と調査客体を接続する形（=同一回答者）で2021年11月、2022年11月に「コロナ禍の生活影響と行動変容に関する調査」を実施し、実施業者の協力を得られれば、パネル化したミクロデータとして行動変容の分析に利用可能になる。
- 結果はこれまで国際共同研究に様々な形でインプット（ワークショップでの議論、サーベイ論文、国際ラウンドテーブル、独自研究など）

ウェルビーイングとは

- **Wellbeing**とは経済的豊かさや心身の健康、社会的健康など、多様な対象を含み、幸福と訳すことが多い。
- 主観的ウェルビーイングは、OECDのガイドラインでは「肯定的なものから否定的なものまで、人々が自分の生活に対して行うあらゆる評価と、人々が自身の経験に対して示す感情的反応を含む良好な精神状態」と定義。
- 生活満足度や主観的健康感などは、アンケート調査で測定可能であり、これまでの様々な研究成果から、利用範囲が広く、正確であるとされている。経済学で効用と呼ぶものに近い概念。
- コロナ禍のように、雇用、家計、消費、教育、人々の交友関係など生活全般に影響する出来事が個人に与える影響を測定したいと考えたときに、主観的ウェルビーイングの変化は一つの有力な手掛かり。

行動変容とウェルビーイング

- また、ウェルビーイングと同時に他の項目も調査すれば、どのような要因がウェルビーイングに影響したかを分析でき、どのような要因がもっとも人々に影響したのかを知ることができる。
- コロナ禍ではテレワークを含む社会的距離の確保など感染予防のために様々な行動が変容。行動に関する項目を調べれば、行動の変容がウェルビーイングにもたらす影響も分析出来る。
- 必要な政策を考える、もしくはは政策の評価や費用対効果、政策に内在する問題点などを分析する手がかりを得ることができる。

調査が簡便

- 家計を調べようとする、家計簿の記録を回答者にお願いする必要。最近でこそスマホのアプリである程度簡単に記録できるというようなこともあるが、それでも、相当の負担を回答者に要求。
- 主観的ウェルビーイング及びそれに関連する項目の調査は、簡単なアンケートで調査することができ、それでいて多くのことが分かる。
- インターネット調査でも可能。この場合、速報性もコストも抜群。研究等でも利用が拡大しつつあり、日本学術会議も提言を公表 (<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t292-3-abstract.html>)。
- コロナ禍では、訪問できないので、そもそもインターネット調査か郵送調査等に限定される。
- 但し無作為抽出をすると、結局高価かつ時間がかかる。一般的な方法、すなわち業者に登録した人から回答希望者を募る方法だと、調査結果にはそれなりのバイアスが発生。

内閣府「満足度・生活の質に関する調査」調査概要

- 調査目的：前述。
- 調査方法：インターネット調査。
- 調査期間・回答者数：
 - 1回目：2019年1月25日～2月7日 回答者数：10293
 - 2回目：2020年2月7日～2月20日 回答者数5281
 - 3回目：2021年3月3日～3月11日 回答者数5234
 - 4回目：2022年2月10日～2月28日 回答者数10633
- 調査対象：日本国内に住む15歳～89歳のインターネットパネル登録モニター。属性ごとの所定の割当に基づき回答者を募る。
- 調査項目：①生活全体の主観的満足度、②生活分野別の重要項目、③生活分野別の主観的満足度、④生活分野別の将来不安度、⑤属性および生活実態。

一橋大学「コロナ禍の生活影響と行動変容に関する調査」の概要

- 調査目的：コロナ禍の主要な影響、行動変容や意識の変化を把握すること。
- 調査方法：インターネット調査で
- 調査期間・回答者数：
 - 1回目：2021年10月27日～11月8日で回答者数5234
 - 2回目は2022年11月2日～11月21日で回答者数3273
- 調査対象：内閣府調査と同様のモニター。同一回答者となるよう優先して募集。
- 調査項目：内閣府の「満足度・生活の質に関する調査」と同様の項目に加え、①子供の教育状況、②要介護家族の状況、③自分の勤務形態・教育の状況、④健康・医療受診当の状況、⑤交流等の状況、⑥家庭内の役割分担の状況、⑦生活のデジタル化の状況などを追加。2回目調査ではさらにコロナ禍の主観的評価についての設問を追加。

2021の時点では若年層を厚めに募集

性×年齢別回答者構成比

2021→2022に若年層の回答者が減少

	男性			女性		
	2021.10総務省人口推計	2021.11調査	2022.11調査	2021.10総務省人口推計	2021.11調査	2022.11調査
男性						
15歳～24歳	5.6%	8.7%	1.2%	5.3%	8.6%	1.0%
25歳～34歳	6.1%	9.0%	5.8%	5.8%	8.9%	6.2%
35歳～44歳	7.3%	9.6%	11.5%	7.1%	9.5%	9.8%
45歳～59歳	12.5%	10.2%	14.4%	12.3%	10.3%	13.4%
60歳～89歳	17.3%	12.0%	18.3%	20.7%	13.2%	18.3%
合計	49%	49%	51%	51%	51%	49%

各調査における回答者と今回調査の接続状態

	2019 満足度調査(第1回)	2020 満足度調査(第2回)	2021 満足度調査(第3回)	2022 満足度調査(第4回)	2021・11 一橋大学調査(第1回)	(2022・3 ESRI追加調査)	2022・11 一橋大学調査(第2回)
今回調査と接続する回答者数	2072	1201	1834	2823	3273	811	3273

ESRIの追加調査を除く5回すべてに回答した回答者数は1625

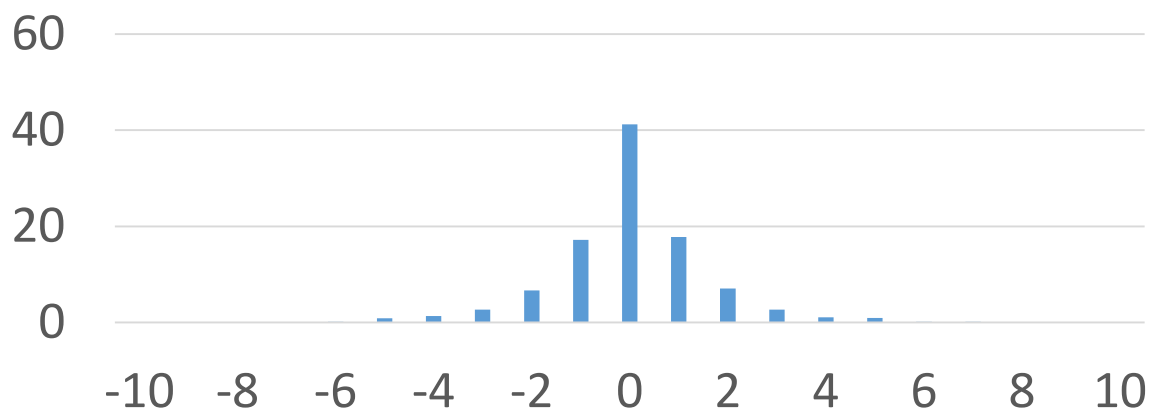
集計結果

主に二回の調査両方に回答していただいた方の回答結果を集計、比較します。

生活満足度：「あなたは全体として現在の生活にどの程度満足していますか。「全く満足していない」を0点、「非常に満足している」を10点とすると、何点くらいになるとお思いますか。」

	回答者数	平均	標準偏差
2021年調査	5234	5.75	2.33
2021年調査（パネル化）	3273	5.71	2.35
2022年調査	3273	5.72	2.37

生活満足度の変化幅の分布（%）



調査時点は両方ともコロナ禍で、ほとんど変化なし

コロナウィルスへの感染の有無

過去1年間のコロナ感染の経験 2022年調査

	なし	あり	合計	感染者の割合	回答者の分布	推計人口の分布
15歳～24歳	81	19	100	19.0%	3.1%	10.7%
25歳～34歳	365	66	431	15.3%	13.2%	11.7%
35歳～44歳	616	116	732	15.8%	22.4%	14.0%
45歳～59歳	781	94	875	10.7%	26.7%	24.2%
60歳～89歳	1,082	53	1,135	4.7%	34.7%	39.4%
合計	2,925	348	3,273	10.6%	100.0%	100.0%

累計感染者数が2022年11月2日時点で、2218万人（推計総人口12550万人の17.7%（なお2021年11月2日時点では172万人））程度で、過小バイアス。

テレワークの状況

	2021年11調査			2022年11月調査		
	現在	コロナ禍	今後	現在	コロナ禍	今後
1 テレワーク（ほぼ100%）	181	187	215	233	221	263
2 テレワーク中心（50%以上）で、出勤を併用	73	120	179	88	129	177
3 出勤中心（50%以上）で、テレワークを併用	84	173	253	96	157	237
4 出勤（ほぼ100%）	733	605	511	634	565	460
5 テレワークが該当しない職業	1,151	1,137	1,064	1,173	1,152	1,087
合計	2222	2222	2222	2224	2224	2224
テレワーク率(1+2+3)	15.2%	21.6%	29.1%	18.8%	22.8%	30.4%

テレワーク率は上昇しており、定着に向けた動きが見える。

主観的健康感

	合計	よい	まあよい	ふつう	あまりくない	よくない
2022年11月回答者数	3273	707	809	1180	434	143
構成比	100%	22%	25%	36%	13%	4%
2021年11月回答者数	3273	732	853	1042	506	140
構成比	100%	22%	26%	32%	15%	4%
構成比 (2022-2021)	0%	-1%	-1%	4%	-2%	0%

ふつうと回答する人が
増えました。

悩みやストレスの有無

	合計	大いにある	多少ある	あまりない	ない
2022年11月回答者数	3273	590	1494	896	293
構成比	100%	18%	46%	27%	9%
2021年11月回答者数	3273	678	1506	814	275
構成比	100%	21%	46%	25%	8%
構成比 (2022-2021)	0%	-3%	0%	3%	1%

悩みやストレス
のない人が増加

健康診断

	合計	例年通り受けた	例年と比べて時期をずらした	コロナ禍では受けなかった（例年は受けている）	コロナ禍では受けなかった（例年も受けていない）
2022年11月回答者数	3273	1913	218	180	962
構成比	100%	58%	7%	5%	29%
2021年11月回答者数	3273	1710	212	264	1087
構成比	100%	52%	6%	8%	33%
構成比（2022-2021）	0%	6%	0%	-3%	-4%

例年通り受ける人が増加

ワクチン接種

	合計	4回接種した	3回接種した	2回接種した	1回接種した	接種していない
2022年11月回答者数	3273	1352	1186	355	13	367
構成比	100%	41%	36%	11%	0%	11%
2021年11月回答者数	3273	0	0	2678	157	438
構成比	100%	0%	0%	82%	5%	13%
構成比 (2022-2021)	0%	41%	36%	-71%	-4%	-2%

オンライン診療の経験

	合計	コロナ禍でオンライン診療を受けている	コロナ禍でオンライン診療を受けていない	コロナ禍でオンライン診療を受けている	コロナ禍でオンライン診療を受けていない
2022年11月回答者数	1734	27	86	22	1599
構成比	100%	2%	5%	1%	92%
2021年11月回答者数	1681	22	53	16	1590
構成比	100%	1%	3%	1%	95%
構成比 (2022-2021)	0%	0%	2%	0%	-2%

経験者は少しずつ増加

感染予防行動

特に社会的距離をとる行動が減少

	合計	マスクを着用する	手洗いが行う	アルコール消毒を行う	他の人との距離を確保したり、人混みや密閉した場所を避ける	不要不急の外出を控える
2022年11月回答者数	3273	2949	2600	2363	1913	1313
構成比	473%	90%	79%	72%	58%	40%
2021年11月回答者数	3273	3052	2719	2572	2160	1765
構成比	536%	93%	83%	79%	66%	54%
構成比 (2022-2021)	-63%	-3%	-4%	-6%	-8%	-14%
	大人数・長時間の飲食や、飲酒を伴う会食を控える	新型コロナウイルス感染症対策をしていない店や場所を避ける	検温する	その他	特にない	
2022年11月回答者数	1702	1131	1222	59	227	
構成比	52%	35%	37%	2%	7%	
2021年11月回答者数	2089	1507	1455	68	157	
構成比	64%	46%	44%	2%	5%	
構成比 (2022-2021)	-12%	-11%	-7%	0%	2%	

コロナ禍の収束に関する認識

	合計	既に収束した	まだ収束していないが、収束に向かっている	収束しない	わからない
2022年11月回答者数	3273	129	970	1814	360
構成比	100%	4%	30%	55%	11%

今後のワクチン接種の意向

多くの方が収束しないと思っている。

	合計	ぜひ接種したと思う	どちらかといえば接種したと思う	どちらかといえば接種したくない	まったく接種したくない	どちらともいえない
2022年11月回答者数	3273	973	1021	533	475	271
構成比	100%	30%	31%	16%	15%	8%

多くの方が接種意欲を表明。

桑原の部分の中間まとめ

- 一橋大学と内閣府経済社会総合研究所が協力することで、大変有用なデータセットの構築に成功。調査結果は内閣府が実施しているコロナ禍に関する国際共同研究ですでに活用中。
- 本調査は、これから小塩先生がご紹介するようにパネル化した上でミクロ分析に用いるためのデータの収集が目的であり、多くの研究者により今後様々な分析が行われることを期待しますが、単純集計値の1年間の比較からも、この間に起きた変化を見ることが可能。
- 本調査から、2021年11月からの1年間で、回答者の生活全般の評価である生活満足度には変化がなかった一方、ストレスが低下していることや、健診を受ける割合が回復しつつあることなどが判明。テレワークが定着する動きがみられることや、今後ワクチン接種に積極的な人が多いこと、感染予防行動も多く維持されていることなど、長期にわたる行動変容が起きていることも垣間見えたと思料。